

Title	競争 - 社会的意味とその適正レベル -
Sub Title	
Author	會田英正(Aida, Hidemasa) 矢作, 恒雄(Yahagi, Tunewo)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1992
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1992年度経営学 第891号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001992-0891

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名

會田 英正

主査 矢作 恒雄

(株式会社 住友銀行)

副査 青井 倫一

姉川 知史

所属

矢作 恒雄 研究室

競 争

—社会的意味とその適正レベル—

現在多くの産業において、過酷ともいえる競争が繰り広げられている。競争は企業が成長していく上で不可欠であるという事がよく論じられているが、過当競争がもたらす利益の低下に苦しむ多くの企業が存在しているという事も疑う余地はない。しかしながら、実際にどのような水準の競争が企業にとって望ましいかという事は明らかにはなっておらず、果たしてその様な水準というものが存在するかどうかという事でさえ必ずしも明らかではないのである。

当論文では、日本の自動車業界におけるトヨタと日産を例として、果たして企業にとって最大の利潤をもたらす競争水準というものが存在するかという事について実証を試みている。実証方法は重回帰分析と事例分析である。重回帰分析においては、'61年から'92年までの約30年間にわたる主として有価証券報告書から得た時系列データをクロスセクションで分析している。そこでは、競争の度合と企業の収益性との間に非線形性を仮定してモデルが構築されている。事例分析においては、'78年11月から'83年12月までの両社の競争行動を新聞から得たデータを基にゲーム理論の枠組みを用いて分析を行っている。そこでは、不完備情報下における囚人のジレンマ型ゲームを基本としたモデルが提示される。これらの分析において、種々の局面において企業にとって最適な競争の水準というものが存在する、という仮説がかなりの確率をもって支持された。ここでの結論は企業にとって最適かつ適正な競争水準の存在を強く示唆するものである。